



熊野義夫博士のご逝去を悼む

本学会の名誉会員、熊野義夫博士は、昭和58年2月16日未明、72歳の生涯をおえられました。同博士は昭和10年より約50年間の長きにわたり、農薬一筋に歩んでこられました。名実ともに農薬界の最長老であられました。本学会においても設立の時より常任評議員をつとめられ、本学会の生みの親のお一人であるとともに育ての親でもあられました。先年古希を迎えられるにあたり、われわれ会員一同は、同博士を本学会の名誉会員にご推挙申し上げました。今後さらに名誉会員として、いろいろと後輩に対してご指導を賜りたく思っていた折に、この訃報に接しましたことは誠に痛恨の極みであります。ここに衷心より哀悼の意を捧げるしだいであります。

熊野博士は明治43年、兵庫県の淡路島にお生れになり、盛岡高等農林学校を経て、九州帝国大学農学部農芸化学科をご卒業になり、ただちに日本農薬株式会社に入社されました。以降今日まで、農薬一筋に活躍され、その足跡はまさに日本の近代農薬史そのものといっても過言ではありません。

同博士の最初の偉大なる研究業績は、なんといっても展着剤(リノー)の発明、企業化であります。当時(昭和11年～13年)農薬の展着剤は、カゼイン石灰と農用石けんでしたが、欠点が多く、農民は難儀をしておりました。同博士はこの課題に取り組まれ、海外のサンプルなどをヒントに、ジグライコールのモノラウリル酸エステルが、汎用性がある、展着性、潤展性に富むことを発見され、これの企業化に成功されました。現在でこそ、多数の展着剤の主成分が、ノニオン系界面活性剤ですが、当時の農業用展着剤では画期的なものであり、多数の農民から感謝と絶賛をあげられました。ほかにも数多くの業績をあげられ、高い評価を受けて、昭和23年、30代の若さで日本農薬株式会社の取締役研究部長になられ、新農薬の企業化、共同研究の推進などに研究開発の責任者として、縦横のご活躍をなされ、昭和33年常務取締役になられました。昭和36年には「BHCの製剤化に関する化学的研究」で学位を授与されておられます。昭和39年には同社の専務取締役になられ、昭

和 44 年退任されるまで、会社経営の要職にもつかれました。それから同社の常勤相談役になられ、この間で最も大きいお仕事は同社の 50 年史の編纂の責任者として、莫大な資料の調査整理、確認を自ら実施され、昭和 56 年 11 月に完成されたことでありましょう。この力作は同社の歴史としてだけでなく、まさにわが国の農薬 50 年史としての内容を持ち、内外ともに高く評価されております。

以上、同博士の業績の一端でございますが、このほか冒頭にふれましたように、本学会の設立以来のご指導や、昭和 40 年から 46 年にわたる農林省農業資材審議会農薬部会委員としての農薬行政におけるご指導などにも携われました。また、教育面でも大阪府立大学、城西大学の農薬学の講師として、学生指導にもあたられました。このように、同博士は農薬の研究、開発はもちろん、企業経営、行政、教育など農薬の多方面にわたり、生涯を捧げられました。

筆者は昭和 24 年より熊野博士からご指導をうる幸運に恵まれ、技術面以外にも多分のご教示を賜りました。ご性格は豪放にして磊落、緻密にして勤はきわめて鋭い方でありました。ご指導は厳しい中にもかかわらず、威張られることなく、大きな声の独得の語り方で話されるお姿などは、いまでも彷彿として、私の脳裏に焼き付いております。また泰然としたご風貌に似ず、何事もお速いのが特徴で、実験、読書、食事、入浴など超人的であり、日本語、英語を問わず読解力もずば抜けた方でありました。不幸にしてご趣味に同席させていただく機会はありませんでしたが、麻雀はお好きだったようで、ご性格のせいかいつもお客さまになっておられたと聞いております。またゴルフは皆好んでパートナーになっていただくことを望んだと伺っております。本当に形式にこだわらない、心やさしいお方でした。ここに不帰の客となられたことはまことに残念でなりません。

終りにあたり、同博士のご冥福をお祈り申し上げるとともに、ご生前のご指導を深謝し、あわせて本学会ならびに後輩の発展を末永くお見守りくださるよう願ってやまないしだいです。

昭和 58 年 3 月

日 本 農 薬 学 会

副会長 細 辻 豊 二